

一宮市三岸節子記念美術館

三岸節子〈短歌ポスト〉入選作品（令和四年前期分）

選者 小塩卓哉（中部日本歌人会顧問）

【優秀作】

さいたさいたさくらがさいた

咲き満ちて涙を流す桜樹あり今日この時を生ききらむとす

奈良県奈良市 松本 嘉子

〈評〉

桜樹は「おうじゅ」と読む。サクラの別称である。サクラの木が咲き満ちて涙を流すとは、どういう意味であろうか。サクラの花の命は短い。満開になっただけで散らねばならぬ運命を悲しんでいるのだろうか。そんな想像力を逞しくする作者は、散る時ではなく、今を強く生きようとしている。それは最晩年の節子も同様であっただろう。

雲と海の対話（夕焼）

ゆうやけにうみとゆうひがまざりあうあすのてんきをかたりあうかな

一宮市立瀬部小学校 三年生 福田 彩月

〈評〉

絵のタイトルが、「雲と海の対話」であるから、まさに、その対話の場面を言葉によって再現してみせた作。海と夕陽とがまざり合う様子を、明日の天気を語り合うようだと、想像力豊かに描いている。雲を直接描かず、色の加減で表現したところが巧みである。全て平仮名で表記したこと、絵画に流れる時の雰囲気も表現し得たようだ。

自画像

斜にかまえ氷のような眼をしてる節子に語る「独りじゃないよ。」

稲沢市 安田 一子

〈評〉

「自画像」の節子の視線を表現した短歌は今までもあったが、ここでは「氷のような眼」と表現されている。この眼は、どこか内面の暗さを感じさせるゆえに、このような比喻となったのだろう。そのような内面を悟った上で、作者は結句のように声を掛けている。そしてこの歌を読む者もまた、そうだと頷かされるのである。



三岸節子《自画像》
1925年 ©MIGISHI



三岸節子
《雲と海の対話（夕焼）》
1975年 ©MIGISHI



三岸節子
《さいたさいたさくらがさいた》
1998年 ©MIGISHI

【佳作】

さいたさいたさくらがさいた

亡き母の画帳にあふれし花々は節子のさくらを 観た日のものなり
愛知県名古屋市 森 和美



三岸節子 《さいたさいたさくらがさいた》
1998年 ©MIGISHI

美術館の建物

節子やかたいる館おこしじゆくわきおうかんを出れば起宿脇往還の美濃路行く春
愛知県一宮市 渡辺 なごみ



一宮市三岸節子記念美術館 外観

ヴェネチア

空も水にも明るさは無しベネチアの街の光に揺れてをりしか
岐阜県岐阜市 渡辺 純枝



三岸節子 《ヴェネチア》
1970年代 高輪画廊所蔵
©MIGISHI

さいたさいたさくらがさいた

今年こそ今年こそとて花見しがけふの桜に勝る花なし
岐阜県岐阜市 桐山 綾子



三岸節子 《さいたさいたさくらがさいた》
1998年 ©MIGISHI

朝がきた (ヴェネチア)

淡々あわあわとヴェネチアの空は澄み通る夫つま亡くせし吾をそつと包みて
石川県小松市 稲垣 ひとみ



三岸節子 《朝がきた (ヴェネチア)》
1971年 ©MIGISHI

一本の樹 (茶)

さみしい木でも強い木だ みきも太くりりしい木だ ポツンと立つが
一宮市立末広小学校 四年生 辻川 雄貴



三岸節子 《一本の樹(茶)》
1985年頃 高輪画廊所蔵
©MIGISHI